

トヨタ財団レポート

THE TOYOTA FOUNDATION REPORT

東京都新宿区西新宿2丁目1番1号
新宿三井ビル37F(〒160)
TEL. (03)344-1701~3

Oct. 1980 No. 11

第22回理事会開催

研究助成など134件の助成対象を決定

トヨタ財団では10月1日、東京にて第22回理事会を開催、下記のとうり昭和55年度の助成対象を決定しました。

● 研究助成	95件	2億7,977万円
交通安全、生活・自然環境領域	32件	1億0,407万円
社会福祉領域	25件	6,268万円
教育・文化領域	21件	7,526万円
特定課題	17件	3,776万円
● 事業助成	16件	3,131万円
国際学術研究集会助成	10件	1,021万円
「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成	6件	2,110万円
● 国際部門助成	8件	3,267万円
● フェロシップ助成	1件	2,500万円
● 研究コンクール	14件	4,200万円
研究奨励賞金賞・研究助成	6件	3,000万円
研究奨励賞銀賞・研究助成	8件	1,200万円
● 以上合計	134件	4億1,075万円

研究助成は本年度で第6回目の助成となります。従来の3つの領域と、昨年より始めた特定課題「地域社会の変化に関する実証的研究」の計4つの分野について、本年4月初日から5月末日にかけて一般公募しました。そ

の結果合計613件の申請をいただき、この中より選考委員会での厳正・慎重な審議を経て前記の助成対象が決まったものです。

事業助成には国際学術研究集会助成と、「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成の2つのプログラムがあります。前者は日本で開催される国際会議に開発途上国の人人が参加する場合の出張旅費・滞在費を助成するもので、本年4月から5月末日にかけて一般公募し、合計20件の申請をいただき、選考委員会での審議の結果前記10件が助成対象となったものです。なお、このプログラムは本年度をもって終了いたします。後者は東南アジアで出版された著作物を日本語に翻訳し出版するための翻訳料を助成するもので4月初日から10月末日まで応募を受け付けております。今回の助成はこれまでに申請のあったものから選考したものです。

国際部門助成は主として発展途上国を対象として、海外からの申請に応じて助成するものであり、フェロシップ助成は(財)国際文化会館が運営する「社会科学国際フェロシップ・プログラム」に対して助成するものです。

研究コンクールについてはP. 2、P. 3をご覧ください。

なお、この理事会において森秀太郎氏が副理事長に選任され、就任いたしました。

研究コンクール現場インタビュー

草津白根山火口湖“湯ガマ”の調査に同行

当財団の5周年記念事業の一つである“身近な環境を見つめよう”研究コンクールでは、6月から8月にかけて、選考委員が分担して、研究奨励賞候補各チームに対し、研究現場のインタビューを実施しました。7月25日には、白根火山研究班（下谷チーム：写真左2人）の研究現場を訪ね、選考委員の高山、竹内（写真右）両先生にインタビューをお願いしました。アドヴァイザーとして東工大の小坂教授（右から2人目）にも同行いただきました。この研究は、“湯ガマ”の水温変化を長期間連続記録し、湖底からの湧出イオウの量のデータとあわせて、火山の活動状況を把握し、ひいては噴火予知にも役立てようとするものです。





研究コンクール・研究奨励賞の選考を終って

研究コンクール選考委員長 沼田 真

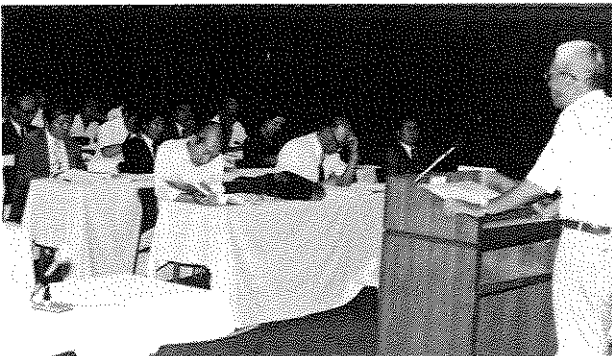
研究コンクール選考委員会では、8月末から9月末にかけて、19件^{*}の研究奨励賞候補の予備研究の成果と研究実施計画について慎重に審査した結果、6件の研究奨励賞金賞と8件の同銀賞を選出し、これを理事会に推薦することとした。

選考に先立っては、選考委員が現地におもむいてのインタビューや、8月末の2日間にわたる東京での報告会などを行い、単に書面による審査だけではなく、対話と現場理解を通じての審査が行われるよう、出来る限りの努力を払ったつもりである。

審査対象となった19チームの研究計画は、いずれも意欲的で何らかの独創的なねらいをもち、短期間であったにもかかわらず予備研究段階でのご努力については、頭の下る思いであった。しかし、この研究コンクールの高い理想と主旨に照して考える時、その意図するところを十分に汲んだ計画は必ずしも多くはなかった。このような試みがわが国では（恐らく世界でも）始めてのものであったことを思えば、むしろそれは止むを得ないことかもしれない。

この研究コンクールの主旨とは、専門研究者の科学的な発想と一般市民の生活現場での発想（両者が一個人の中に同居することもある）とのぶつかり合いの中から、従来の研究活動とは質を異にする、場合によってはそれを越えるようなものが生れ、育つこと、そしてこれらの活動を通して、参加者全員が環境を見つめこれに働きかけることへの共通の参加意識を持つようになることにある。

8月に行われた研究実施計画報告会



当初の事務局からの要望では、10数件の研究奨励賞を選出するようにとのことであったが、論議を重ねて慎重に内容を検討した結果、上記の主旨に鑑みてその意図するところを十分に展開できたと判断されたものは6件に絞られた。しかし、他の8件についてもその持っている可能性は大きく、予備段階で築かれた研究体制を維持し、焦点を定めて活動を発展させるならば、その意義は大きいものと考えられた。そこで当初の応募要項には定めがなかったのであるが、敢えてこれらを銀賞として褒賞し若干の継続研究費を援助することが適切であると判断したのである。

惜しくも今回選にもれた5件のものについても、その熱意は高く今後の可能性をもっていると思う。この研究コンクールの主旨に照していくつかの難点があったとは言え、その活動内容は高く評価できる。それぞれの努力によって何らかの実りを期待したい。

先にも述べたように、このような企画は始めてのことでもあり、選考委員会の審査も非常に難行した。各委員は数度に及ぶ現地インタビューや2日間にわたっての報告会への出席、度重なる委員会での長時間にわたる白熱した論議など、そのご尽力は並大抵のものではなかった。それでもなお応募者の意をどれだけ十分に理解し得たのか、選考結果が応募者の真剣な努力に対して十分報い得るものであったかどうか、どのような選考においてもつきまとう一抹の不安がないわけではない。

受賞チームの方々には今後2ヶ年にわたって研究活動を進めていただく訳であるが、選考委員一同はこれを見守り、その成果が我々の判断の正しさを証明して下さることを願っている。

なお、このような主旨の活動は1回の企画のみで実をあげることは困難である。今回の試みが継続的なプログラムへと展開し、日本の研究風土への新しい息吹きを与えることになれば、この試みの意義は極めて大きなものとなるであろう。^{**}

^{*} この3月には20件の研究奨励賞候補を選出したが、このうち1件は研究チームの都合により辞退申出があり、今回の審査対象は19件となった。

^{**} 本稿は、理事会への説明資料を再録したものである。



研究コンクール報告

「身近な環境を見つめよう」研究コンクール
研究奨励賞金賞 6 件, 銀賞 8 件を決定

トヨタ財団では昨年10月から今年1月にかけて頭書の研究コンクールの研究計画書の公募を行い、その中から20件の研究奨励賞候補を選び、4月から8月までの5ヶ月間それぞれのチームに本研究の実施計画をまとめるための準備研究を進めていただいた。

8月25、26日の両日、研究実施計画報告会が東京の

国際文化会館で開催され、各チームからこれまでの準備研究をふまえた本研究実施計画が報告された。これに前後して第3回、第4回の選考委員会が開かれ、報告会終了後研究奨励賞の第1次選考が行われた。さらに各チームよりの準備段階研究報告書の提出を待って9月24日第5回選考委員会が開かれ、理事会への推薦候補を決定した。なお、当初の応募要項にはなかったことだが、研究の実情に鑑み、金・銀二種の賞が設定された。理事会で承認されたのは以下の14件である。

研究奨励賞：金賞 (金賞チーム6件に対しては、今後2ヶ年分の研究費として一律500万円の助成金を贈呈する。)

コード番号	応募団体名 (責任者・氏名)	対象都道府県	研究題目
C-001	岐阜県哺乳動物調査研究会 (川崎 立夫)	岐阜	岐阜県における哺乳類の生息状況とその環境の調査及び環境教育にかかわる研究
C-022	白根火山研究班 (下谷 昌幸)	群馬	草津白根山火口湖湯ガマの水温変化と火山活動の関連について
C-032	比企丘陵地域自然環境研究会 (土屋 清)	埼玉	総合観測法による地域自然環境の調査
C-070	地域建築研究会 沖縄 (原 昭夫)	沖縄	沖縄における風土重視型建築の研究と実践
C-081	房総半島の孤島性研究会 (鈴木 晃)	千葉	房総半島の孤島性とその文化の研究
C-117	岩倉まちづくり研究会 (奥山 文朗)	京都	岩倉方式(地域協定による土地利用計画の策定)推進に関する研究

研究奨励賞：銀賞 (銀賞チーム8件に対しては、今後1~2ヶ年分の研究費として一律150万円の助成金を贈呈する。)

C-013	(九州)健康科学研究会 (今野 道勝)	福岡	福岡市と八代市近郊の農・山・漁村および都市住民の生活環境・生活形態と健康度に関する比較研究
C-023	離島の水問題研究会 (古川 博恭)	沖縄	宮古島の地下水についての水文地質学的研究、並に地下水開発による環境影響評価―特に地下ダムによる水利用を中心として―
C-049	四季名古屋屋 (川本 康弘)	愛知	季節感からみた繁華街の調査研究 ―名古屋都心部“栄”の場合―
C-065	坂戸の環境を考える会 (早坂 忠之)	埼玉	人口急増地域における共有領域の展開 ―母と子の生活活動の自前性を中心に―
C-069	重信川自然環境研究会 (平井 屯)	愛媛	重信川の下流域、左岸平野部における自然環境とその変動に対する住民の意識構造の研究
C-103	小木町生活文化振興委員会 (金子 繁)	新潟	佐渡郡小木町の生活実態の研究 ―間取りと道具と環境の変化に伴う追跡調査―
C-116	木曾三川イタセンパラ生態保全研究会 (浅野 竣一)	愛知	木曾三川のイタセンパラの生態とその環境保全に関する研究
C-123	明日の近江八幡を考える研究グループ (西川 幸治)	滋賀	近江八幡市における地域文化財を活用した個性的町づくりのための実践的研究



5周年記念事業案内



「街と建物—明治・大正・昭和」

全国巡回報告会

財団設立5周年記念事業の一環として、近代建築史研究会(代表 村松貞次郎)との共催で進めてきた「街と建物—明治・大正・昭和」全国巡回報告会も先月末9/27の北陸地区報告会をもって計10ヶ所に及ぶ各都市での報告会を盛会のうちに終えることができた。ここに改めて各地区の研究者、自治体の方々、市民の方々の温いご支援、ご協力に感謝申し上げます。

さて、残るは11月末に予定している東京シンポジウムであるが、これは地区報告としては最後の関東地区報告、海外からお招きする研究者による招待報告・講演、及び財団でこれまで助成を行った研究チームによる報告等を主な内容とするものである。これにより、一部の建築史研究者の間で始まったリスト作りの作業結果を、より広範な人々にご理解頂き、その中から日本における近代建築の意味を再吟味すると共に、文化的な存在としての近代建築の今後のあり方を探らうとするのが、全国巡回報告会の総括としての本シンポジウムの目的である。

以下に、各セッション毎の概要を紹介したい。なお詳しくは近日中にプログラムを作成の予定である。



日 時：昭和55年11月28日(金)～11月30日(日)
10:00～18:00

場 所：プレスセンター・ホール(プレスセンタービル11F)
東京都千代田区内幸町

●第1セッション 11月28日(金) 10:00～12:30
関東地方(東京は除く)に現存する近代建築遺産について、①産業・旧軍関係施設、②都市施設、③リゾート施設を中心に各々報告を行う。

●第2セッション 同 日 13:30～18:00
東京に現存する近代建築遺産について報告の後、「文化としての都市景観—明治の東京—」(昭和54年度トヨタ財団助成研究)に関する研究報告を行って頂き、その後、上記の2報告と関連して“東京という都市”の歴史性と特殊性を背景に、近代100年の文化的蓄積

としての東京の都市景観の意味・あり方について、各方面の専門家の方々による討論をもつ計画である。

●第3セッション 11月29日(土) 10:00～12:30
韓国・台湾からそれぞれ2名の研究者をお招きし、それぞれの国における近代建築遺産について、あるいはそれらの保存に関する問題について報告をしていただく。

●第4セッション 同 日 13:30～18:00
前半は、近代建築のもつ独特の魅力にとりつかれ、長年に渡り、それらを題材として絵や写真に取り上げてこられた方々の作品をスライド構成にてお贈りしようという計画中である。後半は、これまでの各地区における報告会を顧みて、“果たして日本の近代建築を私達はどのように理解したら良いのか”という観点からの基調講演に基づき、“近代建築史研究の今後の課題”についてリスト作成にあたられた研究者による討論を予定している。

●第5セッション 11月30日(日) 10:00～12:30
イタリアよりM. タフーリ教授(ベネツィア建築大学)をお迎えし、「文化的表象としての都市と建築」をテーマに記念講演をしていただく。

●第6セッション 同 日 13:30～18:00
当財団の助成による下記の3つの研究報告に基づき、都市と建築の保存学について検討する機会としたい。

- ①保存計画におけるリスト作成の意味
(代表：東京大学生産技術研究所教授 村松貞次郎)
- ②地域文化財としての近代の遺産
(代表：京都大学工学部教授 西川 幸治)
- ③保全的刷新：日・欧比較論
(代表：東京大学工学部教授 大谷 幸夫)

報告の後には、3日間に渡る本シンポジウムとこれまでの地区報告会の総括として、文化的環境創造のための近代建築保存・活用の意味と方法について、フロアーの方々も交え討論を行い、今後のあり方を模索したいと計画している。(渡辺 記)

(本シンポジウムにご関心のある方は、官製ハガキにて財団事務局までお申込み下さい。プログラムが出来次第お送り申し上げます。)



活動案内

国際部門セミナー(11月15日(土)午後、於東京)

アジアの植物環境保全に適した澱粉生産植物の開発利用—エタノール燃料の生産を主に—

石油に代る燃料として植物澱粉の発酵によるエタノール燃料の開発が急がれている。効率よく澱粉を生産し、しかも、その栽培が土地の自然条件に合致して自然生態系を破壊しないような植物は何か? ブラジルではキャッサバが栽培されているが、東南アジアでは必ずしも適しているとは言えない。

ニューヨーク植物園アジア部長のテツオ・コヤマ博士は当財団の国際部門助成を得て東南アジアの研究者と共同で2年間にわたりアジアの未開発植物資源についての研究を進めてきた。今回は特にエタノール燃料用の澱粉生産植物の開発利用という点に焦点をあてて話題提供をしていただき、引続き関係する研究者にお集まりいただき今後目指すべき方向性についてブレインストーミングを行う予定である。(場所は国際文化会館講堂、出席希望者は官製ハガキで財団まで)

助成研究報告会(1月31日(土)午後、於東京)

環境化学物質の超微量分析—国際共同研究による地球規模変化の把握—

人類の活動がさまざまな環境化学物質を放出し、それらが地球規模で蓄積されつつある。一体どれだけの蓄積が進みつつあり、それが今後どのような影響をもたらすのか? 長期的な展望のもとにこれらを把握するためには超微量の(PPTレベルでの)分析が必要であり、そのためには高度な国際的な比較に耐え得る分析技術の確立が必要である。

今回は当財団の助成による次の2件の研究報告を行い、上記の課題についての関係者の討論を行いたい。

- 大気中の超微量有機ハロゲン化物の分析ならびに地球環境における挙動に関する研究(東大・富永健他)
 - 近代社会の発達地球規模自然環境の重金属のバックグラウンド濃度に及ぼした影響評価、特に太平洋について(室蘭工大・室住正世他)
- (詳しくは官製ハガキで財団にお問い合わせ下さい。)

助成刊行物紹介

「異邦のことばで」

エドウィン・タンブー編 幸節みゆき訳 幻想社刊
A5 247頁 1,500円

本書はマレーシアとシンガポールの幾つかの詩集のアンソロジーである。英国の植民統治を経験した後、多民族国家として近代化の道を歩んでいる両国ではあるが、エリート階層ともいえる詩人達が自己の心情を表現するためには、最近まで、英語を用いるしかすべは無かった。

自らのアイデンティティを求める彼らのことばは「直截的な怒りや憤りでは決して表現し得ぬ屈折した心情—いたみ」であると訳者は述べる。自らも詩人であるシンガポール大学英文学部長エドウィン・タンブー氏が編集・概説する本詩集は、これまで殆んど知られなかったこの国の人々の心の一端を知るための格好の書であり、英語詩を専攻する訳者の詩人としての才能と、詩人達を直接訪ねた訳者の熱意を感じさせる優れた訳詩集である。同書より下記に2編を引用する。(牧田 記)

美しい村 (カンボム)

アーサー・ヤップ

美しい村とは

ココヤシの林 白い砂浜

ニッパヤシの屋根の家 水道栓

遅しい鶏 緩慢な動き

竈の煙 走り回る子供たち

風にはためく干し物の列、

絵の中のこと。

今では

海辺で海の貝を売る者はなく、

売るのは国防債券のみ。

星の花びらの花が散る

モハマッド・ハジ・サレ

深夜が

往を孕むいま——

闇がまだ盲目で

植込みや車の屋根の上に

夕雨の名残りの露がたゆとう頃

星の花びらの小さな花が散り

湿った大気の中を

最初で最後の旅をして

舗装した車寄せに墜ち

夜更けの窓あかりに仄白い。

死は些細なこと。



国際醸酵会議に出席して

九州大学農学部 教授 上田誠之助

●はじめに：筆者は当財団の成果発表等助成金を得て、ウェスタンオンタリオ大学（カナダ）で昭和55年7月20日～25日に開催された第6回国際醸酵会議（第5回国際酵母会議と共催）に出席し、昭和53年度、当財団研究助成金にて研究した「キャツサバ澱粉の無蒸煮アルコール醸酵に関する研究」の成果を発表した。

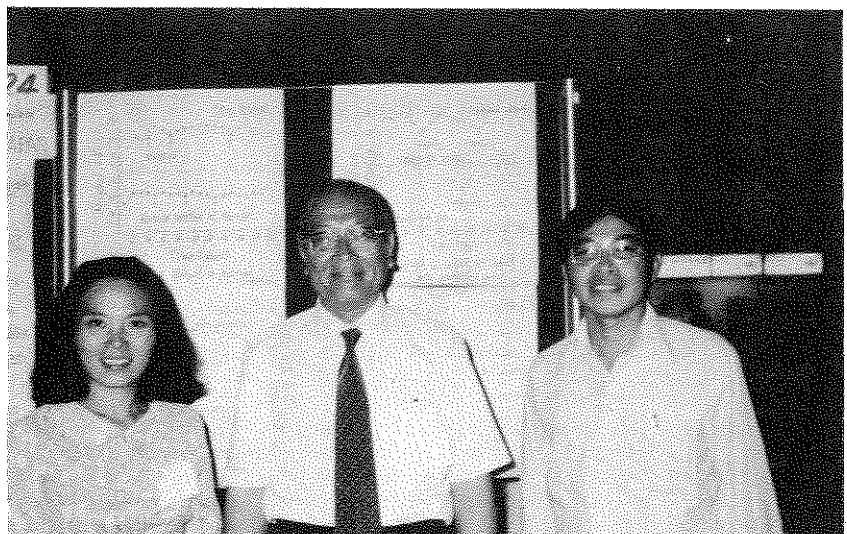
●国際醸酵会議の概要：国際醸酵会議は4年に1度、丁度オリンピックの年に開催され、1976年は西ベルリン、1972年は京都で開催された。今回の開催地ロンドンはトロントの近くにある人口約27万のカナダ第7番目の都市とかで、ウェスタンオンタリオ大学の大学町といった感じの静かな緑の町だった。テムズ川の分岐点に位置し、昔からウェスタンオンタリオ地方のCapitalがあったそうで、真夏というのに最高25℃の乾燥した空気は信州にでもいるような快適な日々だった。町には新旧の建物が調和よくたち並び、例えば数十階のホテルホリデーインの近代建築の隣に1800年代の赤レンガの武器庫が整備よく保存されていた。

会議には47ヶ国より約1,600人の研究者が参集し、演題数825、日本からは74題で、北米、カナダに次ぎ3番に多かった。筆者らのアルコール部会の演題数は32で、特に注目されたのは、細菌Zymomonasを用い、酵母以上の成績でグルコースからアルコールが生産されるという報告

が5題あったことである。この菌は酵母より生育速度、アルコール生産速度にすぐれ、将来、遺伝子工学によって、高温性でセルラーゼをもったZymomonasの出現が期待される。またセルロース、ヘミセルロースなど農業廃棄物からのアルコール生産の報告が9題と多かったが、十分なアルコール収率を挙げるには至っていなかった。immobilized cell（酵母）を用いてのアルコール醸酵の発表が2題あり、ブナのチップが酵母菌体をよく吸着するようで、工業化の可能性が考えられる。生澱粉からのアルコール醸酵についてはデンマークのノボ社と筆者らの報告だけであった。ノボ社の発表は生澱粉を6アミラーゼで糖化させ、酵母でアルコールに出来るという一般原理の発表だけで、この方法の一番の重要点である細菌の汚染を如何に阻止するかについては、何ら言及されなかったし、それに対する質問にも答ええなかった。筆者らは黒麹アミラーゼがpH3.5という強酸性領域で生澱粉を最もよく糖化するので、細菌による汚染はほとんど考えられない事、蒸煮の熱エネルギーが不要な事、1日10%のアルコール生成とアルコール生産性がよい事、アルコールの減圧蒸留によって、アミラーゼ、酵母が再使用可能と省資源的である事などを発表した。

●発表に対する反応：省エネルギー、省資源のこの研究は諸研究者の関心を集め、多数の質問が出たし、約20人の研究者から別刷送付の依頼をうけた。発表の機会を得たことで、世界各地の研究者と討論の場をもつことが出来、また研究の世界的流れも把握しえて、非常に有意義な学会出席であった事を感謝している。

写真右：発表会場での筆者とタイ国の研究者（8年前の教え子）





昭和55年度研究助成対象から —特に若手研究者の紹介を中心に—

●若くなった代表研究者の平均年齢

下の表を見ていただければ分るとおり、研究助成の対象となった代表者の平均年齢は昨年より幾分若くなってきている。研究内容やチーム構成の多様性、あるいは年齢の分散状況等を考えると形式的な平均値の推移のみで論ずることに問題がないわけではないが、やはりこれは最近の助成結果の一つの特徴を示しているように思う。

確かにこの2年で若手研究者への助成の比重が高まってきた。従来は40、50、60代の中堅ないしは円熟期にある研究者が殆んどであったのに対し、昨年度からは20代や30代の若い研究者が目立つようになってきた。若手研究者の増加傾向を単純に民間財団のあり方としてふさわしいと評価することは慎むべきではあるが、少なくとも「実績ある著名な研究者を代表にしないと審査にパスしない」という世間によくある誤解を解く意味では好ましい傾向と言えよう。

●「予備的研究」が若手研究者の進出を促進

ごく大雑把な言い方をすれば、代表研究者の年齢が若い程、個人研究あるいはこれに準ずる小規模な研究が多く、従って研究費も小さい。年齢が上るにつれ共同研究者も多く大がかりな研究となり、研究費用も多くなる。研究内容について見れば、若い研究者の場合には幅広い視点や総合的な認識に基づくというよりも、特異な切り口に重点を置くといったものが多い。それだけに成果についても安心して期待できるというよりも、むしろ難点が気になり不安が付きまとう。

選考委員会でも全員の一致によって推挙されることは稀であって、多くの場合最後まで議論が分れる。議論が分かれた時、敢えて採択するか見送るか問題であるが、最近の傾向としてはむしろ冒険的な試みに対しては思い切って応えようという雰囲気が強い。

必ずしも若い研究者に限ったことではないのであるが、

申請及び助成代表者の平均年齢の推移

年度	全体		「交通・環境」		「社会福祉」		「教育・文化」		特定課題	
	申請	助成	申請	助成	申請	助成	申請	助成	申請	助成
S. 53	47.7	49.8	47.4	48.7	47.9	51.0	47.7	50.0	—	—
S. 54	47.4	48.0	47.2	45.8	—	48.4	48.1	52.4	45.9	44.4
S. 55	46.6才	47.8才	46.2才	46.0才	47.5才	49.2才	46.8才	49.2才	45.5才	47.4才

このような「思い切った」助成が可能となった一つの契機として、「予備的研究」への助成が軌道にのってきたという点があげられよう。事実、20-30才代の研究の多くが予備的研究からスタートしている。

●平均年齢の最も若い「環境」領域

3領域1特定課題のうち、代表者の平均年齢が最も若いのは「環境」領域である。この領域ではただ年齢が若いだけでなく、昨年度からは申請者全体の平均年齢よりも助成対象者となった者の平均年齢が下まわるとい現象が起こっている。自然科学分野の多いこの領域の顕著な特徴である。

若手研究者=20-30才代の研究者と限定するのは問題もあろうが、以下便宜的にこの枠組で話を進めたい。この領域の本年度助成対象は32件であり、このうち代表者が20-30才代のは6件である。これらの研究テーマは下記の通りで、このうち4件は予備的研究である。

空間認知と空間の機能について—特定空間内の人間行動の記録に関する予備的研究—（静修短大講師・川俣甲子夫）

洗濯排水の環境に及ぼす影響—界面活性剤および蛍光増白剤の土壌での生分解—（東京家政大学助教授・片山倫子）

シナントロブ化にともなうドバトの管理と防除に関する研究（山階鳥類研究所主任研究員・杉森文夫他4名）
世帯レベルでの生活安全保障に関する予備的研究（社会工学研究所主任研究員・臺一郎他4名）

マイクロモデルによる重金属の環境影響評価の予備的研究（東京都臨床医学総合研究所研究員・中村佳代子）

日本とアメリカにおける農業水資源政策の理念と実際の比較に関する予備的研究（シカゴ大学大学院博士候補生・ラッツ、ギル・アーヴィング）

新しい問題領域への挑戦という性格が強いと共に、所属機関についてもバラエティに富み、中堅以上の研究者が多く国立大学に片寄り勝ちなのに較べ対照的である。

●20-30才代で1/3を占める特定課題

「環境」領域に次いで平均年齢が低いのが特定課題の研究である。若手の進出という点ではむしろこちらの方が顕著である。20-30才代の研究はここでも6件あり、これは全体（17件）の約3割にあたる。これらのテーマは次の通りである。（次頁につづく）



戦災復興計画における計画思想とその都市形成に及ぼした影響に関する研究（広島大学助手・石丸紀興）

下北半島出身者の職業的社会的化過程についての再追跡調査研究（岩手大学助教授・細江達郎他5名）

地域社会の変化と教育の分業化現象に関する研究（熊本大学助教授・柳治男他4名）

新都市建設に伴う周辺地域社会の変化と都市の成熟化に関する予備的研究（筑波大学大学院・村上仁士他9名）

地域社会「西陣」の戦後の変化に関する実証的研究（野中織物株式会社代表取締役・野中明他13名）

大阪府下における水力開発利用の変化に関する予備的研究（府立城東工業高校教諭・出水力他4名）

特定課題設定の主旨が、従来の専門的な枠組や研究組織にとらわれない新しい視点に立った地域研究の促進を目指したものであるだけに、いわゆるプロの研究者以外にも意欲的なチームが登場している。

●「社会福祉」「教育・文化」領域の場合

これらの領域は平均年齢こそ少しずつ下ってはきているものの、若手研究者の進出という点ではあまり目立たない。幅広い視野を必要とする社会科学・人文科学が中心となるだけに困難な面がある。両領域とも20才代の研究はなく30才代がそれぞれ3件ずつあった。「社会福祉」領域では次の3件である。

津久井町申川地区高齢者の5年目追跡調査（大阪教育大学助教授・守屋国光）

低学歴の外国人のための図説日本語教材開発の試み（世田谷区立新星中学校教諭・村田栄璋）

精神薄弱者の社会的自立に関する基礎的研究（京都教育大学助教授・菊池武尅他2名）

「教育・文化」領域では次の3件である。

職業的自我的形成過程に関する国際比較研究（名古屋大学助教授・藤田英典他2）

韓国企業経営の特質に関する社会学・社会人類学・経営学的研究（東京大学助教授・伊藤重人他3名）

阿賀野川流域における集落の成立過程及び生産領域の変化についての研究（観光文化研究所研究員・須藤護他2名）

国立大学の比重が高くなっているが高校の先生や民間研究所の研究者も登場している。これらの領域でも今後若い研究者が活躍されることを期待したい。（山岡記）

報告書のご案内

第7回助成研究報告会「日本人とアメリカ人——比較研究の意義・方法・可能性」（2月14日開催）の討論の部の記録資料ができました。比較研究の方法論をめぐって専門を異にする各討論者がさまざまな視点から討論を展開し、それによって方法論上の問題点が浮きぼりにされたように思われます。この資料をご希望の方は、ハガキにて、当財団レポート係までお申し込み下さい。報告会前半部分のレジюмеとあわせてお送りいたします。無料です。

〈編集後記〉

▶トヨタ財団レポートは本号から編集担当が交代いたしました。といっても急に内容が変わるというものでもないのですが、少しずつ新しい試みを取り入れていきたいと思えます。

▶設立5周年記念事業として行った研究コンクールが、3年計画の第1年度を終了いたしました。そこで本号では選考委員長の沼田先生に、研究奨励賞選考を終えての総括をご執筆いただきました。お忙しい中を誠にありがとうございました。

▶これからの財団の役割の一つに、分業化と尖鋭化によってますます日常生活から遊離しつつある専門的研究を、日常生活者の視点から見直す、ないしはそのための触媒となるということがあるのではないかと思います。

▶専門的研究の評価は専門家におまかせというのではおもしろくありません。たとえ素人でも、その研究が社会的にどういう意味があるのかという問いは発すべきだと思うのです。

▶財団レポートではこれからも、このような素人の視点から専門的研究をとり上げ紹介していきたいと考えています。

▶また、本来抽象的な「研究」というものを、映像表現を通して視覚化し、素人の想像力の及ぶ日常的なレベルに位置づけることができないものかと考えています。

▶最後にPR。このレポートを継続的に希望されます方は、官製ハガキにて財団までお申し込み下さい。今後引き続き、無料でお送りいたします。

トヨタ財団レポート No.11

発行日 昭和55年10月15日

編集発行 財団法人 トヨタ財団
(担当 久須美雅昭)

印刷 株式会社八重洲企画